

シリーズ／教科書で学ぶ「国土とインフラ」2022～23 第7回：中学「歴史」教科書で学ぶ 「国土への働きかけ」

国土学アナリスト もりた やすお
森田 康夫



1. はじめに

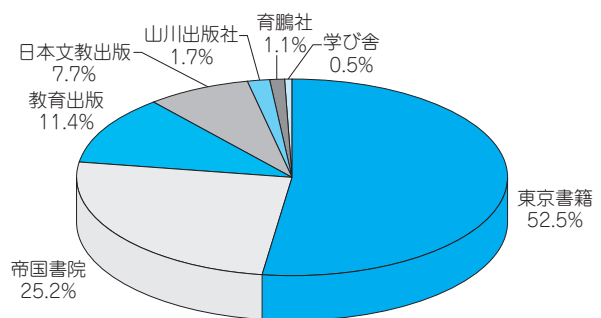
中学校の社会科（歴史的分野）教科書は、前回（平成20年）の学習指導要領改訂（①近現代史学習の重視、②伝統や文化についての学習の充実、③我が国の歴史の背景にある世界の歴史の扱いの充実）によって大きく変わりました¹⁾。さらに今回（平成29年）の改訂でも、「我が国の歴史的事象に間接的な影響を与えた世界の歴史の学習についても充実させる」としており²⁾、これらの結果、教科書全体における時代区分ごとの記述量は、原始～古代が1/7程度、中近世が2/7程度、近現代が4/7程度となっています。

今月号では、2020（令和2）年3月に検定を通過した7社の教科書（東京書籍³⁾、帝国書院⁴⁾、教育出版⁵⁾、日本文教出版⁶⁾、山川出版社⁷⁾、育鵬社⁸⁾、学び舎⁹⁾）（写真－1）を対象として、国土への働きかけに関する記述を時代区分ごとに整理し、紹介していきます（表－1）。

なお、中学「歴史」教科書の出版社別占有率は、東京書籍³⁾52.5%、帝国書院⁴⁾25.2%、教育出版⁵⁾11.4%、日本文教出版⁶⁾7.7%、山川出版社⁷⁾1.7%、育鵬社⁸⁾1.1%、学び舎⁹⁾0.5%です（図－1）。



写真－1 中学「歴史」教科書（令和4年度版）



出典：日本教育新聞 2020年12月7日発行

図－1 中学「歴史」教科書の出版社別占有率（令和3年度）

表-1 各教科書に取り上げられている「国土への働きかけ」に関する記述

	国土への働きかけに関する記述	東京書籍	帝国書院	教育出版	日本文教出版	山川出版社	育鵬社	学び舎	優れた国土・インフラ教材
原始～古代	古代世界文明とインフラ（農耕、灌漑、都市、城壁）	○	○	○	○	○	○	○	
	ローマ帝国とインフラ（道路網・水道）	○	○	○	○	○	○	(○)	
	中国文明とインフラ（農耕・シルクロード・万里の長城）	○	○	○	○	○	○	○	
	植物栽培の開始、定住とムラの発達（三内丸山遺跡）【縄文時代】	○	(○)	○	○	○	○	○	
	灌漑用水路を伴う水田稲作の拡大【弥生時代】	(○)	(○)	(○)	○	○	○	○	
	古墳建設と大和朝廷の国力【古墳時代】	○	○	○	○	○	○	○	『世界最大の墓・大仙古墳（仁徳天皇陵）』（育鵬社）、『ローマ帝国と日本の古墳時代』（同）
	渡来人による土木技術の伝来【5世紀頃】	(○)	(○)	○	○	○	○	○	
	太宰府防衛と大野城・水城の建設【7世紀】	○	○	○	○	○	○	○	
	藤原京の建設【7～8世紀】	○	○	○	○	○	○	○	
	平城京の建設【奈良時代】	○	○	○	○	○	○	○	
中世	中央と地方を結ぶ幹線道路（七道）の整備【奈良時代】	○	○	○	○	○	○	-	
	土地開墾と墾田永年私財法【奈良時代】	○	○	○	○	○	○	-	
	行基による橋や用水路整備【奈良時代】	○	○	○	○	○	○	-	
	平安京の建設【平安時代】	○	○	○	○	○	○	○	
	荘園の拡大（土地開墾）【平安時代後半】	○	○	○	○	○	○	○	
	平清盛による大輪田泊整備と日宋貿易【平安時代末期】	○	○	○	○	○	○	○	
	農業の発達（二毛作、牛馬耕、用水技術）【鎌倉・室町時代】	○	○	○	○	○	○	○	
	交通の発達（馬借・車借・問丸）、都市（町）の成長【鎌倉・室町時代】	○	○	○	○	○	○	○	
	戦国大名による治水・灌漑・交通路整備【戦国～安土桃山時代】	○	○	○	○	○	○	○	『自然を生かした信玄堤』（帝国書院）
	河川改修・新田開発と耕地面積の倍増【江戸時代】	○	○	○	○	○	○	○	
近世	森林伐採と植林（木材需要の増加と土砂災害対策）【江戸時代】	-	●	-	●	-	-	-	『幕府のはげ山対策と都市に住む人々のリサイクル』（日本文教出版）
	人口100万都市・江戸の形成（三都の発展）【江戸時代】	○	○	○	○	○	○	○	『世界有数の百万都市 江戸』（帝国書院）、『江戸の飲料水を支えた玉川上水』（日本文教出版）、『玉川上水』（育鵬社）、『裏長屋に住む棒手振ー江戸の町の暮らしー』ほか（学び舎）
	五街道の整備【江戸時代】	○	○	○	○	○	○	○	
	内航航路（西廻り航路、東廻り航路、河川水運）の開設【江戸時代】	○	○	○	○	○	○	○	『富士川の開削』（山川出版社）
	徳川吉宗による新田開発【江戸時代】	○	○	○	○	○	○	○	
	上杉鷹山（治憲）による藩政再建（新田開発など）【江戸時代】	-	●	○	-	(○)	●	(●)	『上杉鷹山ー自らが模範となって財政を立て直した藩主』（育鵬社）
	田沼意次による新田開発（印旛沼干拓など）・蝦夷地開拓【江戸時代】	○	○	○	○	○	○	○	
	浅間山の大噴火と天明の飢饉【江戸時代】	○	○	○	○	○	○	○	『天明のさきんと復興』（日本文教出版）
	二宮尊徳による農村振興【江戸時代】	-	-	●	-	-	●	-	『農民自身による農村の復興を指導した二宮尊徳』（育鵬社）
	伊能忠敬による大日本沿海輿地全図の作成【江戸時代】	○	○	○	○	○	○	○	『全国を踏破した伊能忠敬』（育鵬社）ほか
近代	欧米諸国の発展と交通インフラ（イギリスの産業革命と鉄道）	○	○	○	○	○	○	-	
	欧米諸国の発展と交通インフラ（アメリカの西部開拓と大陸横断鉄道）	-	○	○	○	○	○	-	
	欧米諸国の発展と交通インフラ（スエズ運河）	●	-	○	●	○	-	●	

表-1 (続き)

	国土への働きかけに関する記述	東京書籍	帝国書院	教育出版	日本文教出版	山川出版社	育鵬社	学び舎	優れた国土・インフラ教材
近代	欧米諸国の発展と交通インフラ (シベリア鉄道)	-	○	-	○	○	-	-	
	鉄道の開通【明治時代】	○	○	○	○	○	○	○	
	電信網の整備【明治時代】	○	○	○	○	○	○	○	
	港や道路の建設、蒸気船の運航 【明治時代】	○	○	○	-	○	○	-	『世界に開かれた港 横浜』(帝国書院), 『世界に開かれた都市・横浜 (地域の歴史)』(育鵬社)
	北海道開拓【明治時代】	○	○	○	○	○	○	○	『移住と開拓が進む北海道』(帝国書院)
	お雇い外国人(土木関係)【明治時代】	○	(○)	○	(○)	○	●	-	『土族の救済事業となった安積開拓』(帝国書院)
	全国鉄道網の整備と国有化【明治時代】	○	○	○	○	○	○	-	『「網の道」と日本の製糸業』(帝国書院)
	国内・外国航路の開設【明治時代】	-	●	○	-	○	○	-	『人口日本一だった新潟県』(帝国書院)
	電気・ガス・水道の普及【大正～昭和時代初期】	○	○	●	○	-	○	-	
	市電・郊外電車・地下鉄・ターミナル駅の整備【大正～昭和時代初期】	-	○	○	○	○	○	-	『発展する産業都市 大阪・神戸』(帝国書院)
関東大震災後の復興、都市計画【大正～昭和時代初期】	●	○	●	○	○	○	(●)	『大都市を襲った関東大震災』(帝国書院), 『後藤新平と杉原千畝』(教育出版)	
台湾に烏山頭ダムを造った八田與一【大正～昭和時代初期】	●	●	●	-	-	●	-	『台湾の植民地化と「近代化」』(帝国書院), 『台湾にダムをつくった八田與一』(育鵬社)	
世界恐慌とニューディール政策／大規模な公共事業(アメリカ)	○	○	○	○	○	○	-		
現代	東海道新幹線と高速道路整備【昭和時代・戦後】	○	○	○	○	○	○	○	『新幹線の歴史を見てみよう』(育鵬社)
	宅地(団地)・ニュータウン開発【昭和時代・戦後】	○	○	●	○	○	○	○	
	阪神・淡路大震災と東日本大震災【平成～令和(現代日本の課題)】	○	○	○	○	○	○	○	『震災の記憶を語り継ぐ』(東京書籍), 『災害の歴史を学ぶ・伝える』(教育出版), 『災害の歴史に学ぶ』(日本文教出版), 『震災の日本史』(育鵬社)
	エネルギー、少子高齢社会【平成～令和(現代日本の課題)】	○	-	-	-	-	○	-	『日本のエネルギーのこれまで』(東京書籍), 『人口の日本史』(育鵬社)

◎:本文+補足資料(テーマ学習, コラム, 図・表・写真・解説)において記述あり, ○:本文において記述あり, ●:補足資料において記述あり, -:記述なし
()はキーワードの一部(アンダーライン部)が欠けていることを示す。
「青字」は、「我が国の歴史と関連する世界の歴史」に関する項目を指す。

2. 原始～古代における「国土への働きかけ」記述

「我が国の歴史と関連する世界の歴史」についてみると、すべての教科書が、古代世界文明(エジプト文明・メソポタミア文明・インダス文明)とインフラ(農耕, 灌漑, 都市, 城壁), ローマ帝国とインフラ(道路網・水道)及び中国文明とインフラ(農耕・シルクロード・万里の長城)に関する記述を取り上げています。

また、我が国の原始～古代史では、植物栽培の開始【縄文時代】、灌漑用水路を伴う水田稲作の

拡大【弥生時代】、古墳建設と大和朝廷の国力【古墳時代】、渡来人による土木技術の伝来【5世紀頃】、太宰府防衛と大野城・水城の建設【7世紀】、藤原京の建設【7～8世紀】、平城京の建設、中央と地方を結ぶ幹線道路(七道)の整備、土地開墾と墾田永年私財法、行基による橋や用水路整備【以上, 奈良時代】、平安京の建設【平安時代】といった項目が、国土への働きかけに関する記述として取り上げられています。

なお、育鵬社⁸⁾には、次のような興味深い学習素材も含まれています。

古墳建設と大和朝廷の国力【古墳時代】に関して、『世界最大の墓・大仙古墳(仁徳天皇陵)』と

いうコラムでは、「大仙古墳は全長 486 m、高さ 35 m、三重の濠を含めた総面積は約 46 万 m² という巨大な墓です。土の総量だけでも 10 トントラック 25 万台分といわれ、1 日 2000 人が働いたとしても、約 16 年もかかる大土木工事でした。この時代に、これほどの大工事を完成させた大和朝廷の国力と技術は驚くべきものです。」と、古墳建設がいかに大土木工事であったかを定量的に説明しています。

さらに、『ローマ帝国と日本の古墳時代』という見開きのページでは、アッピア街道をはじめ「すべての道はローマに通ず」といわれるほど多くの道路を建設したローマ帝国と古墳時代の日本は、シルクロード（ユーラシア大陸を東西に結ぶ交易路）を通して文化交流があった可能性が高いこと、また、日本の大仙古墳（仁徳天皇陵）はサンタンジェロ城（ローマ皇帝ハドリアヌスの墓）やクフ王のピラミッド（エジプト）、始皇帝陵（秦）よりも大きく、当時の日本が高度な土木技術に支えられた文化を持っていたなど、交通インフラや土木技術の視点から、ユーラシア大陸と日本の歴史を見つめ直しています（図-2）。



図-2 教科書の記載例／ローマ帝国と日本の古墳時代（育鵬社）⁸⁾



図-3 教科書の記載例／都市の繁栄と交通路の整備（東京書籍）³⁾

3. 中近世における「国土への働きかけ」記述

中近世における国土への働きかけに関する記述としては、すべての教科書が、荘園の拡大（土地開墾）【平安時代後半】、平清盛による大輪田泊整備と日宋貿易【平安時代末期】、農業の発達（二毛作、牛馬耕、用水技術）【鎌倉・室町時代】、交通の発達（馬借・車借・問丸）【鎌倉・室町時代】、戦国大名による治水・灌漑・交通路整備【戦国～安土桃山時代】、河川改修・新田開発と耕地面積の倍増、人口 100 万都市・江戸の形成（三都の発展）、五街道の整備、内航航路（西廻り航路、東廻り航路、河川水運）の開設、徳川吉宗による新田開発、田沼意次による新田開発（印旛沼干拓など）・蝦夷地開拓、浅間山の大噴火と天明の飢饉、伊能忠敬による大日本沿海輿地全図の作成【以

上、江戸時代】といった項目を取り上げています。

考察してみると、中世に比べて、近世の「国土への働きかけ」の記述量が多く、中でも、学習指導要領・同解説²⁾に明示された「(江戸時代の)産業や交通の発達」については、農林水産業の発達や河川・海上交通や街道の発達などについて、しっかりと記述となっていることが分かります（図-3）。

また、教科書によっては、次のような興味深い学習内容も含まれています。

戦国大名による治水・灌漑・交通路整備【戦国～安土桃山時代】に関して、帝国書院⁴⁾は、『自然を生かした信玄堤』というコラムを設け、信玄堤（霞堤）を図解しながら、「武田信玄は、甲府盆地（山梨県）の釜無川と合流する御勅使川の流れを大きな岩にぶつけて弱め、氾濫を堤防で防ぎました。これにより、繰り返して発生していた洪水の被害を無くすことに成功し、江戸時代には新田

開発が盛んに行われました。」と説明しています。

森林伐採と植林（木材需要の増加と土砂災害対策）【江戸時代】に関して、日本文教出版⁶⁾は、『幕府のはげ山対策と都市に住む人々のリサイクル』という見開きのページの中で、19世紀初めに描かれた京都の里山絵図（『華洛一覽図』）と現在の比叡山・東山の写真を比較しながら、江戸時代の山は草芝状態（はげ山）のところが多く、現代のように樹木が生い茂っていることはなかったと紹介しています。これは、当時の農業を支えていた堆肥（草や木の葉）を確保するためでしたが、その一方で、土砂災害の要因ともなり、幕府が植林や砂留ダムなどの対策を講じていたとあります。

人口100万都市・江戸の形成（三都の発展）【江戸時代】に関連して、いくつかの教科書が、「玉川上水」や「神田上水」を取り上げています。『世界有数の百万都市 江戸』（帝国書院⁴⁾）、『江戸の飲料水を支えた玉川上水』（日本文教出版⁶⁾）、『玉川上水』（育鵬社⁸⁾）、『裏長屋に住む棒手振－江戸の町の暮らし－』ほか（学び舎⁹⁾）がこれに該当します。

開府以来、爆発的に人口が増えた江戸の町は、もともと海岸に近い湿地を埋め立てた造成地が多かったため、井戸を掘っても塩分の強い水が出るなどして、当初から飲料水の確保に悩まされてきました。神田上水と玉川上水の整備は、江戸の水問題を解消するとともに、武蔵野台地の新田開発にも大きく寄与しました。また、玉川上水は、わずか100mの高低差で43km先まで水を流すというもので、当時の技術力の高さをうかがうことができます。

浅間山の大噴火と天明の飢饉【江戸時代】に関連して、日本文教出版⁶⁾は、『天明のききんと復興』というコラムを設け、「天地返し」という農法（深耕し、耕地の表層と深層を入れ替える方法）によって、火山灰が堆積して農作物が育たない事態になった耕地を回復させたという、先人たちの工夫と努力を紹介しています。

育鵬社⁸⁾は、この時代に活躍した偉人の功績をコラムとして取り上げることで、先人たちの国土

への働きかけの歴史とその重要性を効果的に説明しています（『上杉鷹山－自らが模範となって財政を立て直した藩主』、『農民自身による農村の復興を指導した二宮尊徳』、『全国を踏破した伊能忠敬』）。伊能忠敬や上杉鷹山は、小中学校の国語科・道徳科の教科書（伝記）にも採録されていましたし（本誌2022年10月号参照）、上杉鷹山と二宮尊徳は内村鑑三著『代表的日本人』で紹介されている優れた農政実践者です。

4. 近現代における「国土への働きかけ」記述

最後に、近現代についてみると、「我が国の歴史と関連する世界の歴史」では、多くの教科書が、欧米諸国の発展と交通インフラ（イギリスの産業革命と鉄道、アメリカの西部開拓と大陸横断鉄道、スエズ運河、シベリア鉄道）及び世界恐慌とニューディール政策／大規模な公共事業（アメリカ）に関する記述を取り上げています。

また、我が国（日本）の近現代史では、鉄道の開通、電信網の整備、港や道路の建設、蒸気船の運航、北海道開拓、お雇い外国人、全国鉄道網の整備と国有化、国内・外国航路の開設【以上、明治時代】、電気・ガス・水道の普及、市電・郊外電車・地下鉄・ターミナル駅の整備、関東大震災後の復興・都市計画、台湾に烏山頭ダムを造った八田與一【以上、大正～昭和時代初期】、東海道新幹線と高速道路整備、宅地（団地）・ニュータウン開発【以上、昭和時代・戦後】、阪神・淡路大震災と東日本大震災【平成～令和（現代日本の課題）】といった項目が、国土への働きかけに関する記述として取り上げられています。

なお、この時代の教科書記述の大きな特徴は、特定の出版社（帝国書院など）がテーマ学習やコラムを多用して、国土への働きかけに関する興味深い記述を展開していることです。

港や道路の建設、蒸気船の運航【明治時代】に関して、帝国書院⁴⁾は、『世界に開かれた港 横浜』という見開きのページを設け、横浜が港にな

った経緯，当時の横浜港の様子，開港とともにガス灯や電信，郵便，鉄道などの欧米の優れた技術が横浜から取り入れられ，それらが国家的事業へと発展し，今の私たちの生活へつながる大きな変化をもたらしたことを説明しています。また，育鵬社⁸⁾も，『世界に開かれた都市・横浜』という4ページのテーマ学習を設け，様々な資料①横浜応接所に入るペリー一行（1854年）／②開港直後の横浜（1859年）／③明治初期の横浜市街地とその周辺／④横浜波止場のようす／⑤開港直後の街のようす／⑥日本初の鉄道開通／⑦横浜発で日本全国に広まったもの／⑧開港50年ごろの横浜港（1910年ころ）／⑨年表（開港期～明治末）／⑩横浜港貿易額の移り変わり／⑪横浜鉄道線路図（1908年）／⑫横浜港のおもな輸出品の移り変わり／⑬戦争で焼け野原となった横浜市中心部（1945年）／⑭開港100年祭記念式典のようす（1958年）／⑮開港160年の横浜港）を用いることで，横浜港とそれに接続する交通インフラ（鉄道など）の整備が日本の近代化を経済面で大きく支えたこと，横浜が開港以来日本と世界をつなぐ架け橋として機能してきたことを説明しています。

北海道開拓【明治時代】に関して，帝国書院⁴⁾は，『移住と開拓が進む北海道』という見開きのページを設け，近代化を目指した国家の一大プロジェクトとして北海道開拓が進められたことを紹介しています。開拓史長官となった黒田清隆は，北海道と気候・風土が似ているアメリカ東部をモデルに開発を進めようと考え，自らアメリカに渡って，農業に詳しいクラーク博士を招聘しました。また，道路網や鉄道の発達に伴って内陸部での開拓が進んでいったことや，碁盤目状の都市づくりが進められた結果，中心都市・札幌は人口約190万人を超える大都市に成長しました。

全国鉄道網の整備と国有化【明治時代】に関して，帝国書院⁴⁾は，『「絹の道」と日本の製糸業』という見開きのページを設け，開国後日本の重要な輸出品となった生糸が，主要な取引拠点・八王子から「絹の道」を通して（鉄道敷設後は横浜線を通して）横浜港まで運ばれ，海外に輸出された



図-4 教科書の記載例／「絹の道」と日本の製糸業（帝国書院）⁴⁾

と紹介しています。また，富岡製糸場などで生産された生糸も，幕末は利根川・江戸川の舟運（水路）によって運ばれていたものが，明治期以降は整備された鉄道（高崎線など）によって大量に横浜港に運ばれることとなり，近代日本経済を支えたと記しています（図-4）。

さらに，市電・郊外電車・地下鉄・ターミナル駅の整備【大正～昭和時代初期】に関して，帝国書院⁴⁾は，『発展する産業都市 大阪・神戸』という見開きのページを設け，明治以降，大阪や神戸（港）とその周辺地域では軽工業（綿糸紡績業）と重工業が発展したこと，また，この富を用いて阪神電気鉄道，阪急電鉄，近畿日本鉄道などの私鉄各社が創業し，沿線の住宅地開発（神戸など）や観光地開発（宝塚など），ターミナルビル建設（梅田駅）を進めることで，市街地が拡大していったことを説明しています（図-5）。



図-5 教科書の記載例／発展する産業都市 大阪・神戸（帝国書院）⁴⁾

これら以外にも、帝国書院⁴⁾は、『士族の救済事業となった安積開拓』（オランダ人技師による安積疏水整備と地域産業の発展）や『人口日本一だった新潟県』（江戸時代に西廻り航路の重要な港として栄えた新潟は、開国後も外国に港を開いたことで1892年まで東京を抑えて全国一の人口を誇っていた）、『大都市を襲った関東大震災』（後藤新平による震災復興計画の立案と広幅員道路や避難用公園の建設など）、『台湾の植民地化と「近代化」』（台湾に烏山頭ダムを造った八田與一の功績）といったコラムを採録し、我が国の歴史における国土への働きかけの取り組みを効果的に説明するよう努めてくれています。

後藤新平による震災復興は、『後藤新平と杉原千畝』（教育出版⁵⁾）に詳しく紹介されています。「震災翌日、山本権兵衛内閣の内務大臣を引き受けた後藤は、東京を元に戻す「復旧」ではなく、新たによりよい都市づくりをする、東京の「復興」をしていかなければならないと考えます。同年9月29日、帝都復興院総裁を兼任し、復興のための基本方針として、①遷都はしない、②復興費は30億円、③欧米最新式の都市計画を採用する、④新都市計画実施のために地主に断固たる態度をとる、という4原則を策定し、早期に発表することで人々に希望を与えました。「都市における区画整理の実現、舗装された広い街路と緑化、優れたデザインの橋や運河の整備が進められました。また、近代的な様式を取り入れた鉄筋コンクリート造りのアパートや小学校が建設され、小学校の隣接地には、災害時の避難場所ともなる小公園が設置されました。これらの復興事業による都市機能の整備は、現在の東京のまちの原型となりました。こうした関東大震災後の復興事業は、その後、阪神・淡路大震災後の復興事業でも参考にされるなど、災害復興の都市計画のモデルとなりました」。

また、八田與一の功績は、育鵬社⁸⁾のコラム『台湾にダムをつくった八田與一』においても、「八田與一は日本統治時代の台湾に足跡を残した土木技師です。現在の金沢市（石川県）に生まれ

た八田は東京帝国大学卒業後、台湾総督府に赴任し、干ばつと浸水（洪水）をくり返していた嘉南平野のかんがい事業に着手しました。それは大型機械と最新の工法でダムと水路を築くという大事業でした。工事は困難をきわめ、多くの死者を出す事故も起きました。しかし、それらを乗り越えて、10年後の1930（昭和5）年、烏山頭ダムが完成しました。この東洋一の巨大ダムと1万6000 kmにおよぶ水路によって、平野は台湾最大の穀倉地帯に生まれ変わりました」と分かりやすく説明されています。

東海道新幹線と高速道路整備【昭和時代・戦後】に関連して、育鵬社⁸⁾は、『新幹線の歴史を見よう』という見開きのページを設け、①戦前の「弾丸列車計画」（東京～下関間を新路線の特急で結び、将来的には対馬海峡に海底トンネルをつかって北京までつなぐ計画）を活用し、東海道新幹線建設事業がスタートし、幾多の苦難を乗り越えて1964年の東京オリンピックが開幕する9日前に開業したこと、②新幹線開発の裏には、島安次郎、島秀雄、島隆の親子三代にわたる活躍があったこと、③東海道新幹線開業から半世紀以上たった今日では新幹線は日本の旅客輸送の大動脈となっており、開業以来、新幹線が原因となった乗客の死亡事故はなく、その高速性、快適性、安全で正確な運行システムは内外の評価も高く、台湾にも輸出されていること、さらに時速500 kmで走行するリニア中央新幹線が東京・名古屋・大阪間を結ぶ計画であることを紹介しています(図-6)。



図-6 教科書の記載例／新幹線の歴史を見よう（育鵬社）⁸⁾

最後に、阪神・淡路大震災と東日本大震災【平成～令和（現代日本の課題）】に関連して、いくつかの教科書が「我が国の災害の歴史を振り返る」テーマ学習のページを設けています。『震災の記憶を語り継ぐ』（東京書籍³⁾、『災害の歴史を学ぶ・伝える』（教育出版⁵⁾、『災害の歴史に学ぶ』（日本文教出版⁶⁾、『震災の日本史』（育鵬社⁸⁾）がこれに該当します。また、『日本のエネルギーのこれまで』（東京書籍³⁾や『人口の日本史』（育鵬社⁸⁾）といった現代日本の課題に関連したテーマ学習もあり、前者では、戦後復興期に計画され、7年間にもおよぶ難工事の末、1963年に完成した「黒部ダム（富山県立山町）」なども紹介されています。

5. 中学「歴史」教科書のまとめ

以上、中学「歴史」教科書における国土への働きかけに関する記述内容について7社の教科書を比較・整理してきましたが、各教科書ともに、国土形成の歴史や社会資本整備に関する主要な事項を取り上げていること、また、テーマ学習やコラムを活用しながら、国土・インフラ教育面での優れた素材を生徒たちに提供しようとしていることが確認できました。

しかし、いずれの教科書（全体ページ数：300ページ前後）も、歴史上の著名な人物や文化遺産等を主人公とする「政治史・人物史」、「事件・出来事史」であることにはかわりなく、国土形成の歴史や社会資本の役割や効果、社会資本整備に携わってきた人々の苦労などは、教科書全体の中に散見される程度の記述量であるため、これらを体系的に学習することは難しいといわざるを得ません。

ちなみに、いずれの教科書にも取り上げられていませんでしたが、震災からの復興（名古屋市や広島市にある100メートル道路の整備など）、枕崎台風・カスリーン台風・アイオン台風・伊勢湾台風といった風水害との闘い、数次にわたる全国総合開発計画に基づく国土造り、道路整備とモータリゼーションの進展による経済成長など、戦後

の歴史にこそ、国土への働きかけの取り組みがたくさんあります。

日本人の国土への働きかけの歴史の詳細は、大石久和先生の著書、例えば『国土と日本人 災害大国の生き方』（中央公論新社）¹⁰⁾などを参考にさせていただければと思います。

【ノート】外国人の目から見た日本人の姿

どの時代にあっても、日本人にとって普通の出来事は、普通であるが故に取り上げられることはなく、歴史に記録されることもありません。逆に、日常発生することのない特殊な事件や出来事は、特殊であるが故に、珍しいイベントであるが故に、重要なこととして記録され、結果、歴史上の重要事項としてクローズアップされることになるのではないのでしょうか。

そういう意味で、育鵬社の中学「歴史」教科書は、『外国人が見た日本』という興味深いコラムを設けています。ここには、幕末から明治初期に日本を訪れた4人の外国人の目から見た日本人の姿が記されています。

「日本人が世界でいちばん清潔な国民であることは異論の余地がない。どんなに貧しい人でも、少なくとも日に一度は、町のいたるところにある公衆浴場に通っている」（考古学者シュリーマンが見た日本人）、「奥地や北海道を1200マイルにわたって旅をしたが、まったく安全でしかも心配もなかった。世界中で日本ほど、婦人が危険にも不作法な目にもあわず旅行できる国はない」（女性旅行家バードが見た日本人）、「時計と現金を鍵がかからない部屋に1週間預け、旅を終え宿に戻った時、そのままの状態が残っていたことに驚き、日本がいかに安全で人々がどれほど誠実であるかを知って感銘を受けた（動物学者モースが見た日本人）」、「何と不思議なことに、現代の日本人は自らの過去についてもう何も知りたくはないのです。教養のある人は過去を恥じてさえいます。『何もかもすっかり野蛮でした』という人もいれば、『私たちには歴史はありません。私たちの歴史は今から始まるのです』と断言する人もいまし

た。しかし、このように自国固有の文化を軽視することは、かえって外国人の信頼を得られないことになるのです」(医学者ベルツが見た日本人)。

これらは、当時の日本人の姿を克明に描き出しています。文明度からすれば、当時の日本は西欧諸国より数段遅れていましたが、その生活習慣や人情風俗は、彼ら外国人を驚倒させるのに十分でした。このコラムを読むことで、現在の日本人の特徴との共通点や相違点、改善しなければならない課題に気付くことができるのではないのでしょうか。

【参考文献】

- 1) 『中学校学習指導要領解説－社会編』, 平成 20 年 7 月, 文部科学省
- 2) 『中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説－社会編』, 平成 29 年 7 月, 文部科学省
- 3) 矢ヶ崎典隆・坂上康俊・谷口将紀ほか 107 名, 『新しい社会 歴史』, 令和 2 年 3 月 24 日検定済, 令和 4 年 2 月 10 日発行, 東京書籍
- 4) 黒田日出男ほか 14 名, 『社会科 中学生の歴史 日本の歩みと世界の動き』, 令和 2 年 3 月 24 日検定済, 令和 4 年 1 月 20 日発行, 帝国書院
- 5) 久留島典子ほか 27 名, 『中学社会 歴史 未来をひらく』, 令和 2 年 3 月 24 日検定済, 令和 4 年 1 月 20 日発行, 教育出版
- 6) 藤井讓治ほか 59 名, 『中学社会 歴史的分野』, 令和 2 年 3 月 24 日検定済, 令和 4 年 2 月 10 日発行, 日本文教出版
- 7) 橋場弦・桜井英治ほか 21 名, 『中学歴史 日本と世界』, 令和 2 年 3 月 24 日検定済, 令和 4 年 3 月 5 日発行, 山川出版社
- 8) 伊藤隆・川上和久ほか 26 名, 『[[最新] 新しい日本の歴史』, 令和 2 年 3 月 24 日検定済, 令和 4 年 2 月 15 日発行, 育鵬社
- 9) 安井俊夫ほか 34 名, 『ともに学ぶ人間の歴史』, 令和 2 年 3 月 24 日検定済, 令和 4 年 1 月 23 日発行, 学び舎
- 10) 大石久和, 『国土と日本人 災害大国の生き方』, 中央公論新社, 平成 24 年 2 月